

スイス・ベルニナ線の醍醐味と興奮

本連載も最終回となったので、やはり世界でも有数の鉄道王国・スイスの鉄道を紹介しないわけにはいかない。高低差のある、あの小さな国土の中に総延長 5, 000 km を超える鉄道網が張り巡らされているのは、ほとんど奇跡に近い。スイスは、その厳しい気候と土地柄の故に精密機械工業が発達したが、その技術の粋はそのまま鉄道建設にも活かされ、鉄道史上特筆される技術により鉄道が発達した。

いくつもあるスイス山岳鉄道の中でも私が最も好きな鉄道は、サンモリッツ（標高 1, 730 m）とイタリアのティラノ（標高 463 m）を結ぶレイテッシュ鉄道ベルニナ線だ。両駅間距離はほんの 61 km である。山岳鉄道なのに意外にトンネルが少なく、車窓から辺りのまばゆいばかりの絶景を思う存分堪能出来る。その魅力的なアップダウンと急峻なカーブ、それに風光明媚な湖畔を走り、アルプス国境を越えるのだから鉄道ファンにとっては、限られた 3 時間足らずの中で堪えられないほどの醍醐味を味わうことが出来る。

小さく、真っ赤な車両が 10 両ほど連結され、サンモリッツからイタリアへ向かう。灌木帯の中の狭軌を蛇のように走り回る。驚かされるのは最後部から身を乗り出していると、先頭車両に牽引された後続車両が大きく迂回するのが見通せることだ。それが左右に見事に展開される。乗客はカメラを持って右へ寄ったり、左へ寄ったり、列車のサービスぶりや魅力的な車窓風景につれて右往左往している。このベルニナ線は小粒のくせに、乗客をじっとはさせておかない。極めて動的にさせることだ。こんなにワクワクする鉄道は世界にもそんなにあるものではない。アルプ・グリュムでは西にパリュ氷河、南にポスキアーボ湖を眼前に、迫力満点の錦絵が展開される。次いで最高地点オスピオ・ベルニナ（標高 2, 253 m）でパノラマを楽しんだ後、一気に下る。左に主峰ピッツ・ベルニナ（標高 4, 049 m）が見える。樹林帯の間から氷河も見える。紺碧の湖水も見える。

ダイニングカーのワイングラスがみんな傾いている。この傾いたワイングラスが評判になって、スーブニール・グッズとして売られている。これこそこの急勾配が産みの親である。食事が終わったころになってタイミングよくワゴンが販売に来る。

オスピオ・ベルニナからかなり下ると、列車は何ヶ所かアーチ状の石橋を急カーブしながら、‘キーン、キーン’と金属的な音を絞り出すようにして走る。その石橋の下をもう一度同じ列車がくぐる。まるで‘あやとり’のようだ。お伽列車が走っているような幻想に捉われる。

雲上のスイスから下界のイタリアに近づいてくると、人通りも激しく、窓の外もざわめいてくる。終着駅ティラノへは一般道路上を走り、路面電車となって滑り込む。プラットフォームから振り返ると、いま下ってきたたおやかなアルプスが、燦々と輝いて見えた。

（近藤節夫 記）